

日本語における2タイプの「ス」体とその語用論的機能

Two types of *-su* in Japanese and its pragmatic meanings守田 美子¹¹大妻女子大学文学部Yoshiko Morita¹¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：若者ことば，敬語，関連性理論

Key words : Youth language, Honorifics, Relevance theory

抄録

現代日本語には「5時です」を「5時ッス」というように話す言葉づかいがある。これは若い男性が主として使用すると考えられ、親しい間柄にある目上の相手に「親しみのこもった敬意」を伝える新しいタイプの敬語と考えられてきた。しかしながら、この「ス」の使用が拡大するにつれ、その意味は拡大し、敬意よりも「ノリの良さ」や「軽さ」を示す一種の談話標識として機能しはじめている。

本稿ではこの2タイプの「ス」体を取りあげ、この2タイプがそれぞれ別の言語形式である可能性を指摘した後、これら2つの「ス」の語用論的意味を関連性理論の枠組みで考察する。

1. はじめに

本稿では現代日本語において若い男性がよく使用されるといわれている「ス」体について考察する。これはたとえば「5時です」を「5時ッス」のように話す言葉遣いである。この言葉遣いは従来、単なる若者ことばの一種と考えられてきたが、近年その使用は拡大し、現在ではメディアでも使用されるようになってきている。

先行研究によると、この「ス」体という話し方が伝える意味は大きく分けて2つある。1つ目の意味は「親しみのこもった敬意」である。たとえば先輩に対して常に「です・ます」体を使用する、体育会系クラブに所属する男子部員が、親しい先輩に対しては語尾を「ス」にして親しみを伝えるといった場合だ。

もう1つは「ある特定の印象や自分の心情を相手に伝える」機能である。たとえば「ス」体を使用することで、自分は「ノリのいい若手男子」であるといった印象や、その場に応じた特定の心情を聞き手に伝えるといった具合である。この「特定の印象や心情」は文脈によって変化すると考えられる。また実際の自分というより、相手に示し

たい自分を演出する手段であったりすることもある。たとえば女性の話し手が、男性的な印象を相手に与えるために使用したりすることもできる。

興味深いことに、この2つ目の特定の印象や心情を相手に伝えるという使用法の場合、1つ目の相手に敬意を伝えるという機能は希薄となり、口語的でぞんざいな言い方と解釈されることがある。わかりやすく言うと、人物Aが人物Bに時間を聞かれて「5時ッス」と答えた場合、AはBに対する丁寧語のつもりで答えたのに、Bはそれをむしろ礼儀を欠いた言い方と受けとって不快に感じるといったことが生じる可能性がある。

先行研究ではこの2つの意味ニュアンスが異なる「ス」体を1つの連続体として扱い、前者の敬意用法から後者が派生したと推測している。しかし、なぜ一見相反するように思われる意味が一つの言語形式に同居できるのだろうか。本当にこの2つの意味が異なる「ス」体は同一構造を持つ言語形式なのだろうか。そしてこの相反するように思える意味の共存を、語用論の立場からどう説明できるのだろうか。

本稿では、この問いについて、次の2つを試験

的に提案する。

まずこの2つの意味機能の異なる「ス」体を、別の言語形式ではないかと仮定する。すなわち、敬語としての「ス」は「です」の省略形であり、コピュラと考えられるが、より広範囲に解釈が可能な「ス」はコピュラではなく、いわゆる「キャラ語尾」と呼ばれる談話標識の一種ではないかと考える。その根拠は、生起環境において違いがみられることである。コピュラの「ス」は「です」と生起環境が一致するが、談話標識の「ス」は必ずしも一致しない。

次にこの2タイプの「ス」体を関連性理論の枠組みで考察すると、その語用論的意味の差異が説明できることを指摘する。すなわちコピュラとしての「ス」は表意の一部を形成し、飽和プロセスによって「です」と復元されるか、あるいは「です」のカジュアルな変種として解釈されるが、談話標識としての「ス」は高次表意の明示化であり、命題内容に対する話し手の心情や態度を伝達する機能を持つと主張する。従って、前者の「ス」は敬意の表出と解釈されるが、後者の「ス」が伝達する意味は文脈によって多様に解釈されると考えられる。このように考えると、同音の「ス」が相反する意味で解釈されることが説明できると思われる。

2. 「ス」体の発達

2.1. 敬語としての「ス」体

「ス」体の発生がいつどのように起こったのかは定かではない。その使用が大幅に拡大するのは1990年以降だが、話し言葉としては1950-60年代辺りから使用されていたようである(倉持, 2009^[1], 中村, 2020^[2])。たとえば中村は1954年出版の『サザエさん』に、サザエさん宅で仕事をする職人(左官屋)がサザエさんの母親のフネに「仕事は済んだのですが」という意味で「仕事はすんだんスガ…」と話している1コマが存在することを指摘している(中村, 2020, p.12)。

この例からもわかるように「ス」体は、丁寧語「です」の口語的な省略から派生したと考えられる。省略されているとはいえ元の形が丁寧語である以上、一種の敬語表現と考えられてきた。実際、尾崎(2002)^[3]は「新しい丁寧語」と呼び、呉(2015, p.151)^[4]は「常体と敬体の中間話体」と位置づけて「ネオ敬語(neo-honorifics)」と名付けている。

近年において敬語としての「ス」体は、体育会系クラブに所属する男子大学生や若い男性会社員などに多く観察される。上下関係を意識する場で若い男性が目上に対して使用する言語スタイルとみなされている。中村(2020)は2016年に同じ体育会系クラブ所属の男子大学生の会話の談話分析を行ったところ、「ス」または「ッス」を使ったのは後輩学生から先輩学生に対してのみで、その逆はなかったと指摘している。また同時に先輩に対して「ス」体を使用する後輩学生も、同級生同士で話す時には使用していなかったと報告している。

「ス」体が敬語として使用される動機は何なのだろうか。先行研究において共通に指摘されていることは「親しみのある敬意」を表現できるからということである(中村, 2020, 呉, 2015, 倉持, 2009)。従来の「です・ます」といった丁寧体では、時として他人行儀な印象を与えることがある。だが親しくても目上の相手であれば、友達同士のような言葉遣いをする訳にはいかない。しかし丁寧体の省略形である「ス」体なら、カジュアルな丁寧体として敬意と親しみを同時に表現することができる。この便利さが「ス」体使用の普及拡大の源泉であったと考えられる。

2.2. 軽さを表現する「ス」体

近年、「ス」体はテレビCMなどメディアでも広く用いられるようになった。そこで使用される「ス」体はよく言えば自由に、悪く言えば勝手気ままにふるまう「軽い」キャラクターが使用する言語スタイルとして採用されているように見受けられる。

この新しいタイプの「ス」体発話は相手に対する敬意表現と考えられない場合が多い。次にあげるのはテレビドラマからの例である。

(1) 女性(40代)「なんすかなんすか！」

男性(40代)「なんすかなんすかって、なんでヤンキー口調になってるんですか？」

ドラマ『最後から二番目の恋』より
(呉, 2015, p.177, 呉, 2020, p.153)^[5]

聞き手の男性は「ヤンキー口調」という表現からもわかるように、この「ス」体を含む発話を敬意表現とはみなしていないことがわかる。また話し手は40代の女性ということからもわかるように、「ス」体の使用者は必ずしも若い男性とは限らなくなっている。

なぜこのタイプの「ス」体発話には、敬語としての意味合いが希薄なのだろうか。そしてこの変化はどのようにして起こったのだろうか。

中村は日常会話で使用される表現がメディアで採用されると「指標的意味の統制 (indexical regimentation)」が起きると指摘している (中村, 2020, p.93)。日常会話の中のある言語表現が、メディアに取り込まれると、社会の中に存在する特定のイデオロギーを体現するために使用されるようになり、その結果、従来持っていた多様な意味が縮小して限定的な意味だけを持つようになるという現象である。中村によると、日本語には「正しい」敬語のルールが存在し、多くの人々がそれを遵守することが社会人の常識であるといったイデオロギーを持っている。そういった人々にとって、「ス」体は誤った敬語の形であり、従って「ス」体を使用する人々は「常識のない社会人」として認識される傾向がある。結果として「ス」体の意味の縮小が起こり、従来の敬語としての意味が失われたという。

しかしながら「ス」体の発話は、常に礼儀に欠けているとして相手に不快感を与えるわけではない。文脈によると考えられる。たとえばテレビCMなどの広告で使用される場合、韻を踏んで面白さを出したり、ドラマなどでも、明るく自由に周囲に好かれる登場人物が使用していたりすることがある。つまりこの軽い「ス」体の方が、文脈によって多種多様な意味に解釈することが可能なのであり、相手に対する親しみのこもった敬意という元来の意味は消失したというより、その多様な解釈の中の1つに過ぎなくなったとみなすことができると考えられる。

3. 生起環境の違い

今までの先行研究では、社会言語学的見地から、敬語の「ス」体と「軽さ」を示す「ス」体を、変化する連続体として扱っている。確かに通時的には、後者は前者から派生したものであろう。しかしながら本稿ではこの2つの「ス」体をそれぞれ別の言語形式と考えてその語用論的意味について考察していく。すなわち敬語タイプのものは丁寧体「です」の短縮形でコンピュータであるが、「軽さ」を示す「ス」は役割語化しつつあるキャラ語尾の一種と考えられる談話標識であることを主張していく。

2種類の「ス」体を仮定する根拠は生起環境の違いである。コンピュータの「ス」よりも談話標識の「ス」の方が生起環境が広範囲である。特に前者は動詞に直接付加することができないが、後者は動詞に付加することが可能であるという特徴がある。またあいさつ言葉などにも自由に付加することができる。

3.1. 動詞に付加できないコンピュータの「ス」

コンピュータの「ス」は元来「です」の短縮形であるため、その生起環境は「です」のそれと一致する。一般に「です」は名詞や形容詞の後に付加されるのに対し、「ます」は動詞の連用形に付加される。従って「ス」も(2)(3)(4)の各例文が示すように、名詞、形容詞、形容動詞の後に生起することは可能だが、例文(5)のように動詞の連用形の後に付加して「ます」の代用にはできない。

- (2) 本 (です/ッス)
- (3) 暑い (です/ッス)
- (4) 元気 (です/ッス)
- (5) 行き (ます/*ッス)

しかし「ス」は本当に動詞に直接後続することはできないのだろうか。確かに「行きッス」は容認できないが「行くッス」になると容認度が上がるように、筆者を含む日本語母国語話者には思われる。ではこの「行くッス」の容認性について、先行研究でどう観察されているかを見ることにしよう。

まず尾崎は「行くッス」は日常生活で使用されていることもあるようだが、自身が2000年前後に作成したデータベースの分析では、動詞+ス形は観察されなかったと述べている (尾崎, 2002, p. 97)。また倉持は2008年のアンケート調査の結果として「ス」が付加されやすいのは形容詞、名詞、副詞の順であり、「行くッス」「あるッス」「雨が降るッス」といった動詞に付加された「ス」の使用頻度は比較的低いことを観察している。

この「行くッス」の派生プロセスについて、尾崎 (2002)は次のように論じている。一般に動詞の後に「です」が現れるときは、「行くのです」のように、動詞の連体形に準体助詞「の」(「ん」)を付けて名詞化される。従って「行くんす」または「行くッス」は、(6)のように「行くのです」の省略と考えられる (尾崎, 2002, p.97)。

- (6) 行く (のです/んす, ッス)

尾崎 (2002)の説明ならば、「ス」と「です」の生起環境は一致するという仮定は保持されるが、全ての「動詞＋ス」形は「動詞＋ののです」の省略形と捉えなくてはならなくなる。しかし「僕が行くッス」は「僕が行くのです」の省略形というよりは「僕が行きます」の同意義表現であるように考えられる。これはどのように説明するべきなのだろうか。

3.2. 動詞に付加できる談話標識の「ス」

興味深いことに、筆者の調べた限りでは、2010年以降の研究では、前述したそれ以前の研究と異なり、「ス」は動詞の後に付加されると記述されるようになってきている。たとえば呉は「ス」は動詞にも付加されるとし、これを「形態統語的中和」と述べている (呉, 2015, p.154, 呉, 2020, p.129)。また中村は「ス」は動詞の連体形「行く」に付加されるとしている (中村, 2020, p.16)。つまり二人とも「ス」の生起可能な環境は「です」と一致しないとみなしていることとなる。

倉持 (2009)は、「動詞＋ス」形がブログにおいて多用されることを指摘している。

- (7) ... 友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回ったッス。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違うことを発見したッス。 ... (倉持, 2009, p.30)

例(7)の「回ったッス」や「発見したッス」は「回ったのです」「発見したのです」の省略とみなせないこともないが、このブログの書き手はおそらく「回った・回りました」「発見した・発見しました」の意味で用いていると推測される。そしてこれらの「ス」体はコンピュータではなく談話標識と考えられる。この書き手が自分よりも目上の読者のみを対象としているとは考えにくいからである。

この観察から、次のようなことが仮定できると思われる。コンピュータの「ス」体使用の拡大により、2010年あたりから談話標識の「ス」体使用が台頭してきた。しかし、これは単なる意味の拡大ではない。既存形式を模倣した別の言語形式である。

つまりコンピュータの「ス」体は「です」の省略形なので動詞の後に生起しない。動詞の後に生起するように見える場合は「ののです」の省略形である。一方談話標識の「ス」体は「です」だけでなく「ます」の代替としても機能できるため、動詞の後に

自由に生起することができる。

実際、この仮定を支持するものとして、中村 (2020)による敬語としての「ス」体の観察がある。中村は2016年に体育会系クラブの先輩・後輩男子大学生の会話の量的談話分析を実施し、後輩学生は先輩に対して「です」「ます」「ス」を使用するのに対し、先輩学生は全く使用しないことを観察している。中村はさらに学生たちの発話に出現する動詞＋「ス」体は「(た) んスカ/よ」という形になる場合がほとんどであることを指摘している。

- (8) で、一泊してきたんスカ?

- (9) 自分、あ、面買ったんスよ。

(面＝剣道の面)

- (10) 雪あった いっぱいあったッスカ?

え、それ車で行くんスカ?

(中村, 2020, p.46-48)

例(8)-(10)は全て後輩学生の発話である。それぞれの例は、「一泊してきたのですか」「買ったのですよ」「あったのですか」「行くのですか」の省略と解釈することができる。

それでは一方例文(7)で示したように自由に動詞に後続可能で、敬意よりも「軽さ」を示す「ス」体は一体何なのだろうか。次節ではこのタイプの「ス」が話し手のキャラクタを示す役割語にみられる「キャラ語尾」のような特徴を持っていることを示していくこととする。

3.3. キャラ語尾的な「ス」体

日本語には「特定のキャラクタと結びついた、特徴ある言葉づかい」(金水, 2003, p.vi)^[6]と定義される「役割語」という特殊な発話スタイルが豊富である。これは人が思い描く特定の人物像とリンクする話し方で、主に小説や映画などで多用される。ストーリーの登場人物が白い髭を生やした博士ならば「わしにはわかっておったのじゃ」というような特殊な話し方をしても自然に受け止められる。金水 (2003)は、この一人称の「わし」や語尾の「じゃ」を含むような言葉づかいは「博士語」と呼び、「役割語」の一種と述べている。役割語は語彙やイントネーションなど話し方全体を含む概念だが、特に文末の語尾にその特徴が表出する。この話し手のキャラクタを表現する要素は「キャラ語尾」と呼ばれている (金水, 2003, p.188)。

定延 (2007)^[7]はキャラ語尾をさらに「キャラコンピュータ」と「キャラ助詞」に分別している。

キャラコピュラとは日本語の「だ」「です」...のようなコピュラの変種で、話し手のキャラクタを表現するものである。前述した「博士語」の「博「じゃ」もそのひとつである。

キャラコピュラは普通体のコピュラと類似していることが多い。たとえば「でござる」は「でございます」と類似する。しかし「でござる」の文は必ずしも「でございます」の文と同一ではない。定延は「行ってきたでござる」を「行ってきたです」または「行ってきたでございます」とすると、非文法的とはいえないまでも容認性が下がることを指摘し、キャラコピュラはコピュラよりも動詞への後続が容易であるという一般的な性質を持つと論じている(定延, 2007, p.29-30)。

3.2.節で談話標識の「ス」は、コピュラの「ス」と異なり、動詞の後に生起できる特性があるという事を指摘した。このことからこのタイプは、キャラ語尾、特にキャラコピュラである可能性がある。事実、定延も「ス」体を「体育会系男子後輩キャラ」を体現するキャラコピュラに分類している(定延, 2007, p.30)。

ただこのタイプの「ス」は動詞に後続できるだけでなく、さまざまな要素に自由に付加することが可能である。倉持(2009)は「ス」体の新しい使い方として、「こんにちわッス」のようにあいさつ言葉に付加する用法があることを指摘している。大学生を対象にした倉持の調査によると、女子学生は全く使わないが、男子学生は63%が何らかの形でこの「ス」がついたあいさつ言葉を使用していた。またさまざまなヴァリエーションがあったが、大別して、あいさつ言葉に「ス」が付加されただけのタイプAと、あいさつと「ス」が一体化しているタイプBに分類された。

(11) タイプA-あいさつ言葉+「ス」

・おはようっす こんにちはっす さようならっす など

(12) タイプB-あいさつ言葉と「ス」の一体化

・ちよりっす ちゅーす ちーす など

このタイプBは、「こんにちは」の省略形「ちわ」に「ス」が付いた「ちわす」の変種と考えられる。

例(11), (12)にみられる「ス」は、もはや「です」の省略形と考えることはできない。倉持は、特にタイプBのような「ス」はもはや敬意機能を持たず「親しさを示す機能を担う『パーツ』である」と指摘している(倉持, 2009, p.34)。

このようにあいさつ言葉にも自由に付加されるという特性があるので、本稿では談話標識の「ス」をキャラコピュラと断定せず、飽くまでキャラ語尾の一種である談話標識と位置づけることとする。

キャラ語尾とも断定しないのは、4.1.で述べるようにこのタイプの「ス」体が伝達する語用論的意味は多様であり、その話し手に特徴的なステレオタイプが確定していないことによる。

まとめると、現代日本語には2種類の「ス」体が存在することになる。すなわちコピュラと考えられる「ス」と、談話標識と考えられる「ス」である。

4. 語用論的意味の違い

この節では、2種類の「ス」体が伝える語用論的意味の違いについて、関連性理論(Relevance Theory)の枠組みから論じる。そして、本稿の冒頭で述べた、なぜ談話標識の「ス」は、コピュラの「ス」と異なり、敬語としての意味が希薄であるのかということ、語用論的機能の違いという観点から説明することを試みる。

4.1. 談話標識の「ス」が伝える意味

談話標識の「ス」が伝えるものは、コピュラの「ス」と違って文脈により多種多様に変化する。まずどのような意味を伝えることがあるのか、先行文献で指摘されているものを4点あげることとする。

まず談話標識としての「ス」は、話し手の本音や率直なコメントを表現するのに使用されることがある(倉持, 2009, 呉, 2015, 呉, 2020)。

(13) (野球)やりたくてしかたないっすね。いま、ホントに。(後略)

(13)の例文のように呉は「話し手の本音、指摘領域に関わる内容」といった命題内容に「ス」が付加されることを指摘している(呉, 2015, p.164)。

次にスポーツ選手などは、「ス」体の使用によって試合直後の興奮や高揚感を示すことがある。倉持は北京オリンピックにおける3人の男性メダリストが勝利確定直後のインタビューで「最高っすね」「これが自分色のメダルっすね」「みんなのおかげっす」など、「ス」体を多用したが、時間が経過した後のスタジオでのインタビューでは「ス」ではなく「です」を使用する頻度が高くなったと指摘している(倉持, 2009, p.29)。

第3に「ス」体は話し手の個性を際立たせるために使用されることがある。例文(1)でも見たが、「ス」体発話の話し手は男性とは限らない。中村(2020)は男子学生と同様、上下関係に厳格な体育会系の運動部に所属している女子大学生の中には「ス」体を使用する者もいるが、男子大学生に比べると頻度が非常に低いことを指摘している。その上で中村は女性の使う「ス」体は「話し手の個性、すなわち社会的アイデンティティ」を表現するために用いられると主張している(中村, 2020, p.183)。この観察は言い換えるなら、女性が使用する「ス」体は主としてキャラ語尾の特性も一部持ち合わせている談話標識としての「ス」であり、コンピュータの「ス」ではないということの意味する。そもそもキャラ語尾とは、自身のキャラクタやその時の心情を聞き手に伝えるという目的で使用されるものなので、女性が「ス」体を使用しても何の問題もないこととなる。

最後にテレビCMなどで使用される「ス」体は伝える意味よりも音や全体のリズムの面白さに焦点が置かれていることがある。次の例(20)は大阪ガスの太陽光発電のCMの一部である。

(14) 大阪ガスなら プロの施工で安心だから さすがっす

(中村, 2020, p.191)

上の例文における「さすがっす」はガスと語呂合わせとなっていることがわかる。

次節では、本稿で使用する関連性理論の枠組みについて簡単に説明することとする。

4.2. 関連性理論の概略

関連性理論とは Sperber & Wilson (1995)^[8]によって提唱された語用論の理論で、人間のコミュニケーションは関連性を基準にして行われるものと仮定する。そして全ての意図的かつ明示的な伝達は、必ず最適な関連性を見込みを伝達するものだと考える。ここでいう最適な関連性とは聞き手による話し手の発話処理の労力と、発話解釈によって得られる認知効果のバランスによって供給されるものである。

それでは話し手の発話が伝える意味にはどのようなものがあるのだろうか。関連性理論では表意(explicature)と推意(implicature)という2種類の意味を想定する。前者は発話内の言語化されている部分を手がかりに推論することによって得ら

れる明示的な意味である。一方、後者は発話に明示的に示されておらず、推論によってはじめて得られる意味となる。

本稿では「ス」体が伝達する語用論の意味について考察するため、その意味は表意の一部と考えられる。従って、表意について、もう少し具体的に説明していくこととする。

表意には「基礎表意」と「高次表意」があると考えられている。基礎表意は Carston (2002)^[9]によると、(i)曖昧性の除去(disambiguation)、(ii)飽和(saturation)、(iii)自由拡充(free enrichment)そして(iv)アドホック概念形成(ad hoc concept construction)の4つのプロセスによって生成される。

まず(i)の曖昧性の除去とは、多義語や曖昧文がもたらす複数の解釈を1つに調整することである。また(ii)の飽和と(iii)の自由拡充は、共に発話が提示する不完全な命題内容を完成させる作業である。ただし前者は、代名詞や指示詞の先行詞決定など言語化されている要素の復元操作であるのに対し、後者はより自由に言語要素を補充する作業である。

(15) John met Mary in the garden. She looked sad.
(She=Mary)

(16) She picked a gun and shot him. (=She picked a gun and shot him with the gun.)

(内田, 2013, p.46)^[10]

例(15)は代名詞 she は飽和により Mary と解釈され、例(16)は with the gun という語句が自由拡充されることによって、解釈されることになる。

最後に、(iv)のアドホック概念形成だが、発話における単語の意味は、文脈によって本来の辞書の意味と多少外れていることがある。

(17) The steak at the restaurant was raw.

(内田, 2013, p.47)

例(17)における raw は、本来の意味である「生の」ではなく、十分に焼かれていないといった意味であり、このように語の意味が臨時に変化することで適切に解釈される。このように、文脈によって語に付与される臨時的な意味のことをアドホック概念という。

一方、高次表意とは発話命題に対する話し手の発話行為や命題態度のことである。たとえば例(18)における B の発話の高次表意は例(19)が候補として考えられる。

(18) John: Is there anything to eat?

Mary(sadly): No, there isn't.

(19) Mary (says/believes/regrets) that there is nothing to eat.

(内田, 2013, p.51)

この例文(18)では高次表意は Mary の態度や言い方によって示されている。このように高次表意は言語または非言語によって明示され、聞き手によって解釈される。

次節では、この節で紹介した関連性理論の枠組みに基づいて「ス」体を分析していく。

4.3. コピュラの「ス」体

コピュラの「ス」が伝えるものは「親しみのこもった敬意」である。これを前節で述べた関連性理論の枠組みで考えるなら、聞き手が「ス」体発話を敬語として解釈する時、「ス」は飽和プロセスによって「です」と復元されていると考えられる。

(20) 先輩, お疲れ様です。(=お疲れ様です)

「です」は丁寧体であり、相手に対する敬意を表すと考えられる。話し手がそれを「ス」と省略したことは、相手に対する「親しみ」を示す手段として行った明示的な意図伝達行為である。聞き手はそれを解釈することで「親しみのこもった敬意」の伝達という関連性に到達できることとなる。

ただ飽和プロセスというのは(15)のように、通常代名詞や指示詞の指示付与を言う。この場合、元の形と復元された形は同一とみなすことができる。しかし、たとえば英語の縮約形 *wanna* が示唆するものは、元の形である *want to* と同一であるとは限らない。このように考えると、別の考え方として「ス」は「デス」と同一ではなく「ス」自体に、たとえば *less formal* といった独自の意味記載がある「デス」の変種であるということも考えられる。その場合、聞き手は *formality* の欠如という「ス」の特殊な語彙的意味を高次表意のレベルで「親しみの示唆」と解釈することとなる¹。

4.4. 談話標識の「ス」体

4.1. で見たように談話標識としての「ス」は文脈により、話し手の心情や発話に対する態度を反映する。これは談話標識の「ス」が発話の高次表意を明示していると仮定することで説明できる。

(21) 僕が行くっす。

(22) The speaker says (in a friendly way / honestly /

excitedly / impolitely...) that he will go.

上の(21)の例における「ス」は話し手の心情や相手に与えたい印象の存在を告知する標識であり、その伝達内容が何であるかは(22)に示したように文脈に依存すると考えられる。相手に対する親しみの表現と解釈することもできるし、4.1. で見たように話し手の本音の吐露や気持ちの高揚などとして解釈することもできるし、堅苦しい礼儀作法にとらわれない自由なキャラクターであることを表現する手段と受け取ることもできる。

内田 (2013)は、日本語では高次表意が言語化していることが、英語より頻繁に起こる言語であると指摘している。たとえば日本語の助詞は発話命題に対する話し手の発話行為や命題態度が具現化したものであり、高次表意の明示化と解釈される。

(23) He's coming toward us.

(24) こっちへくるよ。

(The speaker says that he's coming toward us.)

(25) こっちへ来るぞ。

(The speaker says that he's coming toward us.)

(26) こっちへ来るね。

(The speaker says that he's coming toward us.)

(27) こっちへ来るな。

(The speaker says that he's coming toward us.)

(内田, 2013, p.95-96)

例文(24)-(27)が示すように、日本語では助詞によって告知、警告、確認、予想といった高次表意が言語化されることが多い。一方英語ではいずれの場合も(23)が用いられ、必ずしも明示する必要がない。

まとめると、関連性理論の枠組みで考えるなら、本稿の冒頭で述べた2つの「ス」体がある時は敬語として解釈され、ある時は礼儀に欠けた言い方としても解釈されうる理由が自然に説明できると考えられる。コピュラの「ス」は飽和によって「です」と解釈される、または「です」のカジュアルな変種として解釈されるが、談話標識の「ス」は高次表意の明示化として文脈により解釈されるからである。

5. まとめと今後の展望

本稿では相反する意味を持ちうる2タイプの「ス」体を取りあげ、第2節でその特性を概観し、第3節でこの2タイプがそれぞれ別の言語形式な

のではないかと提案し、第4節で、敬意と不遜という矛盾するように思われる意味の派生について関連性理論の枠組みで説明を試みた。この最終節ではここで述べた提案がどのような意味を持つ可能性があるかについて述べていきたい。

5.1. キャラ語尾の派生について

「ス」体の先行研究においては、2タイプの「ス」体は連続的に変化しつつある同一のものとして扱われている。たとえば中村(2020)ではジェンダーと結びついている女性ことばのように、何らかの「〇〇ことば」に進化しつつある若い男性の敬語として「ス」体をとらえている。また呉(2015)では敬語としての「ス」が時として役割語的要素を持ちうると分析している。

しかしながら、本稿では敬語の「ス」と談話標識の「ス」について、後者は前者が通時的に変化したものというより、前者を模倣して生まれた別の言語形式であるという立場をとっている。つまり前者はコピュラであるが、後者は談話標識であり、同音であるため見分けにくいことがあるが、違う文法的特性を持つことを指摘した。

この見方は、以下に述べる他のキャラ語尾、及び役割語にも共通してみられる特性に合致するように考えられる。すなわちプロトタイプの言語形式に類似する形で別の言語スタイルが生まれてくるというパターンである。

まず秋月(2012)^[11]は、「わかったニャン」のように動物の鳴き声や特徴などが表出する動物キャラ語尾を分析し、その一部はオノマトペがキャラ語尾へと文法化したものであると主張している。

マンガではよく吹き出しのセリフの外に「ドキッ」といったオノマトペが書きこまれていることがある。これに似た用法として、例文(28)(29)のように、文の外にオノマトペを付け足すと、文全体に色取りを添えることができる。

(28) あたいがんばる！にゃん♪

(29) こう寒くて、天気が悪いとお客さんが来ないよー。ポン。

(秋月, 2012, p.48)

上の(28)-(29)では、ネコの「にゃん」やタヌキの「ポン」といったオノマトペが文外にいわゆる「ショーアップ語」として配置されている。秋月は動物キャラ語尾はこのようなショーアップ語のオノマトペが、文末語尾として文中にとりこまれるこ

とによって派生したと述べている。

次に役割語もまたある特定の言語変種をモデルにして生まれた経緯を持っていることが多い。

役割語は、「博士語」のように小説やアニメなどの仮想空間の人物のみが使用し、現実の日常生活で使用されない。しかし金田(2008)^[12]は役割語の一般的特性について述べる中で、ある時代に特定の人々によって話されていた話し方が元になっている場合が多いとし、たとえば「博士語」は18世紀後半から19世紀初頭にかけて江戸で使用されていた上方に由来する話し方がモデルであると述べている(金田, 2008, p.86)。

キャラ語尾は日本語において生産性が高い言語形式であると思われる。本稿で提案した2つの「ス」体が異なる言語形式を持つという見方は、今後より多くの量的データによる立証が必要であるが、キャラ語尾を含む多様な談話標識の派生の一般化への方向性を示すものかもしれないと考える。

5.2. キャラ語尾と高次表意

本稿では談話標識と考えられる「ス」体が伝達する語用論的意味を、終助詞と同様に高次表意の表出であると提案し、その解釈は文脈によって多種多様であると述べた。

しかしながら多種多様といっても、その中に何らかの一定の方向性、または傾向のようなものはないのだろうか。ここでは女性ことばとの比較を通して簡単に考察していくこととする。

守田(2020)^[13]は女性ことばに見られる「わ」や「の」といった語末表現を分析し、これらも高次表意の具現化として機能することがあると主張した。

現代日本語において女性ことばは実際の日常会話ではほとんど使用されなくなっているが、外国語から翻訳された女性の発話や、ドラマや少女漫画などの女性登場人物のセリフの中では使用されている。そしてその使用動機の中の1つは、話し手が伝えるべき特殊な感情を持っているということを知ることであると考えられる。

つまり従来の女性ことばは話し手の「女性らしさ」やそれに付随する優しさや控えめさなどを表現する手段としてのみ考えられてきたが、現在の衰退した女性ことばは役割語化、またはキャラ語尾化しており、従来の意味にとらわれず、話し手

が相手に伝えたい心情を表現するマーカーとして機能することがあるのである²。

興味深いことに、高次表意の女性ことばが伝える話し手の心情は、4.1節で述べた談話標識としての「ス」が伝えるものと共通するものが多いように見受けられる。

4.1節では、「ス」体が話し手の (a) 本音の吐露、(b) 興奮や高揚感 (c) 話し手の個性やキャラクター (d) 音の面白さ を伝えることがあることを示したが、ここでは特にこの中の (a) と (b) が女性ことばの語末表現の使われ方と類似していることを指摘する。

まず(a)の本音の吐露についてであるが、女性ことばは、ドラマや少女マンガにおいて登場人物女性の本音や主張を示すために使用されることが知られている (水本 & 福盛, 2007,^[14]高橋, 2009^[15], 水本, 2010^[16], 中村, 2013^[17])。特に少女マンガでは、普段おとなしい女性登場人物が、普段隠している (特に悪意のこもった) 本音や怒りなどを吐露するときなどに、女性ことばが使用されることが観察されている。

次に (b) の興奮や高揚感であるが、外国人女性アスリートのインタビューがテレビニュースなどで放送される時、その翻訳のテロップには女性ことばが使用されることが多いことが報告されている。

太田 (2011)^[18]は北京オリンピックの際にテレビで放映された外国人選手のインタビューにおける翻訳テロップを分析し、特にメダル獲得直後のインタビューは、女性ことばに翻訳されることが多かったことを指摘している。たとえば「スタジアム中が世界新を期待しているを感じたの」といった具合である (太田, 2011, p.110)。太田はこれを「女王語」と呼び、女性ことばには女らしさや優しさだけでなく、勝利者としての自信誇示や試合後の高揚感を伝える機能があるとしている。

このように見てくると、役割語化した語尾が高次表意の表出である場合に伝える語用論的意味について、より統一した説明が可能であるのかもしれない。終助詞など他の語末表現とも比較してより多角的な研究が必要であると考えられる。

謝辞

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (課題番号 S1983) の助成を受けたものです。

また査読者の方々より有益なコメントをいただきましたことに、この場を借りてお礼申し上げます。

注

- 1 本文では less formal としたが、査読者より「ス」は丁寧形「デス」の省略形というより「ダ」の impolite form である可能性について重要な示唆をいただいた。今後の課題として考えていきたい。
- 2 査読者より少年漫画における女性ことばの使用は、話し手が相手に伝えたい心情表現の標識というより、話し手の女性性を表現する手段として使用されている傾向があるという、興味深い指摘を頂いた。つまり少年漫画という文脈においては、女性ことばの役割語化は遅滞している可能性がある。

引用文献

- [1]倉持益子. 新敬語「ス」の使用場面の拡大と機能の変化. 明海日本語. 2009, 14(2), p.25-35.
- [2]中村桃子. 新敬語「マジヤバイっす」ー社会言語学の視点からー. 白澤社, 2020.
- [3]尾崎喜光. “新しい丁寧語「っす」”. 現代日本語研究会編. 男性のことば・職場編. ひつじ書房, 2002, p.89-98.
- [4]呉泰均. “ネオ敬語「ッス」の語用論的機能”. 日本語語用論フォーラム 1. くろしお出版, 2015, p.151-182.
- [5]呉泰均 2020. 日本語聞き手待遇表現の社会語用論的研究. 北海道大学出版会, 2020.
- [6]金水敏. ヴァーチャル日本語ー役割語の謎. 開拓社, 2003.
- [7]定延利之. “キャラ助詞が現れる環境”. 金水敏編. 役割語研究の地平. くろしお出版, 2007, p.27-48.
- [8]Sperber, Dan & Deirdre Wilson. Relevance: Communication and Cognition. 2nd ed. Oxford:Blackwell, 1995.
- [9]Carston, Robin. Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication. Oxford:Blackwell, 2002.
- [10]内田聖. ことばを読む, 心を読む. 開拓社, 2013.
- [11]秋月高太郎. 動物キャラクターの言語学. 尚絅学院大学紀要. 2012, 64, p.43-57.
- [12]金田純平. 役割語ー文法論とコミュニケーション

ン論を横断する新概念. 月刊言語. 2008, 37(5), p.84-89.

[13]守田美子. 映画の字幕翻訳等における女性ことばが伝達する語用論的意味と異文化コミュニケーション教育. ATEM ジャーナル. 映像メディア英語教育学会. 2020, 25, p.59-72.

[14]水本光美・福盛壽賀子. 主張度の高い場面における女性文末詞使用－実際の会話とドラマの比較. 北九州市立大学国際論集. 2007, 5, p.13-22.

[15]高橋すみれ. 悪女の「役割」－少女マンガ『ライフ』にみる少女の「女ことば」－. ジェンダー&セクシュアリティ: ICU ジェンダー研究セン

タージャーナル. 2009, 4, p.17-37.

[16]水本光美. 主張度の高い女性文末詞使用の変遷－4世代にわたる調査分析－. 北九州市立大学基盤教育センター紀要. 2010, 6, p.11-26.

[17]中村桃子. 翻訳がつくる日本語－ヒロインは「女ことば」を話し続ける. 白澤社, 2002.

[18]太田眞希絵. “ウサインボルトの“I”はなぜ「オレ」と訳されるのか－スポーツ放送の「役割語」を読む”. 金水敏編. 役割語研究の展開. くろしお出版, 2002, p.93-125.

Abstract

The purpose of this paper is to study *su*, a colloquial variant form of the copula verb in Japanese. The form has been regarded as an abbreviation of *copular verb desu* and used mostly by young males in a casual and friendly speech/interaction. For example, they may say *5-ji ssu* (it's 5 o'clock) instead of *5-ji desu*. This form has been regarded as a new type of honorifics, showing respect and familiarity at the same time. Through its more popularity and wider use, however, this colloquial form has acquired a new meaning. Instead of showing respect to the hearer, the new type of *su* may convey an impression that the speaker is a person being carefree and much less polite.

In this paper, these two types of *su* are examined and it is assumed that the new type of *su* is no longer a copula variant but a discourse marker, implying the speaker's feelings or attitude toward the proposition denoted by the utterance. It is also suggested that the meaning discrepancy between these two types may be accounted for within the Relevance Theory framework.

(受付日: 2020年10月30日, 受理日: 2021年1月8日)

守田 美子 (もりた よしこ)

現職: 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

津田塾大学大学院博士課程後期満期退学.

専門は英語学. 形態論. 現在は語彙語用論を基盤にした日本語のコミュニケーションについて研究を行っている.